

高等教育シリーズ 107 大学授業の生態誌

島田 博司 / 2001 玉川大学出版部
Hroshi Shimada / 2001

村瀬 泰信 MURASE, Yasunobu

● 国際基督教大学教育研究所
ICU Institute for Educational Research and Service

戦後、拡大の一途をたどってきた我が国の大学進学率は 2000 年春、ついに 49% に達した。大学教育が広く大衆に開かれるようになったとき、そこにはどのような変化が生じるのだろうか。そして、その変化に大学はいかに対応すべきなのだろうか。かつて、マーティン・トロウはこのような問いに対してエリート・マス・ユニバーサルというスキーマで説明を試みた。トロウはエリート段階からユニバーサル段階へと高等教育が発展する中で、なによりも最初に学生集団が同質集団から共同体意識や一定水準のない極度の多様性を持った集団へと変質する一方で、教師集団は大衆化への適応が最も遅れるという見解を示した。当時、こうしたトロウの発展段階説は多くの高等教育研究者に受け入れられたが、一方で天野郁夫が指摘しているようにそれは実証のない仮説に過ぎないのも事実であった。

今日、大衆化が現実のものとなった大学教育の現場では「私語が多く、授業が成立しない」といった大学教師の嘆きが多く聞かれるようになった。変容を続ける学生集団とその対応に苦悩する教師集団。深まる両者の意識の溝は如何にすれば埋められるものなのだろうか。

本書はこれまで「私語はあってはならないもの」という旧来通りの大学授業観で語られることの多かった授業改革提言のあり方を批判する。そして、

「情報化」と「消費化」を軸に現実の大衆化が進行する今日の高等教育の現場における学生集団の様相を長年にわたる地道な実地観察で読み解くことによって、解決の糸口を見いだそうとしている。

具体的に本書では「要領」をキーワードとして、ノート取り・座席とりという学生の行動に焦点を絞りつつ、長年のデータを元に綿密な分析を行っている。その結果、現代の学生集団にとって第一に消費化という観点からは大学授業の効用性や有用性、そして充足感や満足感が重要になりつつあること。第二に情報化という観点から、いまや学生達は個人的な知識情報の獲得ではなく、自らの行動が如何に充足感を得られるかといった行動情報を求めるようになったこと、などをその特徴として指摘している。一方で、本書は同時にこうした変化への教師集団の対応の遅れが今日の授業の混迷を招く大きな要因となっていることも見逃していない。このような分析の結果を受ける形で、本書は最終章において大学授業のエデュテイメント化とデジタル化をふまえた具体的で現実的な対応の考慮がなされた新たな授業モデルを提案している。大学教育の臨床現場における実地観察を元に、旧来主張されてきたこれまでの授業観を覆すような大胆な改革モデルを提示しながらも、平易な文章で綴られた本書は高等教育研究者向けというよりもむしろ全ての大学教育関係者に幅広く一読を薦めることの出来る書と言えるだろう。